

令和5年度 新採用教職員辞令交付式 教育長式辞

令和5年4月3日（月） 10時
レイボックホール

令和5年度さいたま市立学校新採用教職員辞令交付式にあたり、挨拶を申し上げます。

ただ今、辞令を交付しました366名の、意欲と情熱に満ちた皆さんを、さいたま市教育にお迎えできたこと、大変うれしく、心強く感じております。今日、皆さんにお渡しした辞令には、さいたま市の教育界に新しい風を送り込んでほしいと願う市民の期待や、子どもたちの健やかな成長と幸せを願う保護者・地域の方々の熱い思いが込められています。皆さんの活躍を心から御期待申し上げます。

さて、2020年から世界を揺るがしてきた新型コロナウイルスも、適切な対策を講じた上で社会の機能を回復させていく試みが世界的にも多くみられ、ポストコロナを見通せる状況となってまいりました。この間、サテライトオフィスや自動運転、遠隔医療といった、デジタル化の促進等が示すとおり、社会はこれまでに私たちが経験したことのない速度で、劇的な変化を遂げています。学校教育においても、教育DXの実現に向けた取組は大きな広がりを見せ、クラウドの活用、オンライン授業など、いつになったら実現できるのかと考えてきたことが、一気に現実のものとなりました。今こそ、「教える」から「学ぶ」へ、日本の教育を変えることができる、今でなければ変えることはできないと考え、時代の変化に適応した学びの実現に本気にならなければなりません。

「教える」から「学ぶ」への授業改革を目指す、この令和5年度、皆さんは教員としての第一歩を踏み出します。一人ひとりの幸せ(Well-being)を実現する未来の教育へと、前進してまいりましょう。

皆さんをお迎えするにあたり、次の言葉を送ります。それは、「教えるとは、ともに希望を語ること」です。これは、フランスの詩人であるルイ・アラゴンが書いた「ストラスブール大学の歌」の中にある一節です。この詩が創作された歴史的背景は、世の中に暗雲が立ち込めている時代でした。フランスの名門校であるストラスブール大学は、ドイツとの国境近くにありますが、ナチスの弾圧から逃れるために一時、フランス中部に移転し、教育活動を続けていました。しかし、1943年、11月、移

転した先で、たいへん痛ましい事件が起こります。それは、ストラスブール大学の教員と学生が銃殺され、数百名が逮捕されるというものでした。当時、レジスタンス活動に参加していたルイ・アラゴンは、このことに強く抗議し、彼らの死を悼みました。人々が、死や暴力、不正義に怯え苦しむ時代にアラゴンが訴えた「教えるとは、ともに希望を語ること」という言葉は、教育の本質を的確に表現し、今、この時代に必要とされる教師の在り方であると思います。昨年から続くロシアによるウクライナ侵攻は、その地に暮らす人々の生活を破壊し、世界に暗い影を落としています。日本に暮らす私たち自身も、距離が離れているとはいえ、自分たちの生活に漠然とした不安を抱いてしまう状況となっています。そのような状況であるからこそ、子どもたち一人ひとりの幸せ (Well-being) ひいては、社会全体の幸せ (Well-being) の実現を目指し、私たちは、困難の中にも希望を語る言葉をもっている教師でなければならないと強く感じます。

今日から皆さんは、子どもたちを導き、育てるといふ、崇高な職責を担うこととなります。たとえ苦難や困難に遭遇しても、初心を忘れることなく、それぞれの立場で、さいたま市の教職員として、その力を存分に発揮されることを期待しております。子どもたちへの指導等に悩むことがあっても、決して自分ひとりで抱え込まないでください。周りには、本日、一緒に辞令が交付された仲間や、懸命に努力を重ねている諸先輩方がいることを忘れないでいただきたいと思います。

結びにあたり、皆さんが健康に留意されるとともに、日本の未来を担うさいたま市の子どもたちのために、精一杯御活躍されますことを祈念し、式辞といたします。